

## 令和元年度 市老連県外視察旅行感想文

～研修委員に任命され初めて参加したその感想を中心にご報告します～

上井地区研修委員 土井 承夫

(令和元年 10 月 4 日作成)

去る 9 月 11 日（水）から 13 日（金）の 2 泊 3 日の旅でした。1 日目の行先は三重県桑名市で、まず「六華苑（ろっかえん）」を訪問しました。鹿鳴館の設計で有名なイギリス人建築家ジョサイア・コンドルによる明治・大正期を代表する木造二階建ての重要文化財です。

その後は平成の大合併で桑名市に吸収された温泉で有名な長島町の「なばなの里」です。室内外に咲き誇る花々、特にペゴニアガーデンの展示は圧巻であり二台のバスのメンバーがそれぞれ集合写真を撮りました。その写真は直ぐに全員に配られました。被写体が良いせいかわバックの花々も生き活きと写っています。

実は私は会社（日立金属）の転勤で昭和 61 年から平成 5 年までの 8 年間この桑名市に家族 5 人で住んでおりました。男の子ばかりの 3 人の子供がまだ小さい頃でした。久しぶりに見る桑名の風景は基本的には変わっておらず懐かしさが込み上げてきましたが、その時期の私の生活体験から僭越ではありますが、桑名について少しお話をさせていただきます。

ここ桑名は東海道五十三次の四十二番目の宿場町ですが愛知県・尾張の国の熱田の宿（有名な熱田神宮のあるところ）から五十三次のなかで唯一船で海路をわたって来る宿配町でした。その海路が七里の距離であったことから「七里の

渡し」と言われ六華苑の近くにその船着き場があります。蛤やしじみが採れたので「桑名の殿様焼き蛤」が有名になりました。然しこの殿さまは將軍家の偉い方で松平定綱公と松平定信公を祭る鎮国神社が六華苑から近い九華公園（桑名城のあったところ）の中にあります。

今回旅行に参加された方はご覧になりましたが、そばを三つの大きな河川が流れています。木曾川、長良川、揖斐（いび）川でこれらを「木曾三川（きそさんせん）」と呼んでいます。名古屋から近鉄電車に 20 分乗りこの木曾三川を渡ると愛知・尾張の国に別れを告げて三重・伊勢の国に入ります。実はこのポイントが重要で、ここから大きく食文化や生活様式さらには方言も変わります。愛知・尾張の国が八丁味噌や醤油の味の濃い食べ物、即ち「味噌煮込みうどん」や真っ黒な汁の「きしめん」等が主流に対して、三重・伊勢の国では薄味で半透明の汁の「うどん」を頂くことになり「歌行灯（うたあんどん）」と

いうお店が特に有名です。言葉も尾張名古屋は「どえりゃーうみゃーでいかんわ」等と猫の遠吠えの様ですが、伊勢の国桑名では柔らかい関西弁になります。結局、尾張は民衆から成り上がった武士が造った国であるのに対し、伊勢は天照大神（あまてらすおおみかみ）がおわす伊勢神宮のお膝元であり「皇室の在所（ざいしょ）～実家の事」という意識が強いたぶん尾張に対する少なからぬ優越感は多くの三重県民の心底にはあると思います。

この日の泊まりは長島温泉のガーデンホテル「オリーブ」でした。実はこのホテルは通路が繋がって隣接する「ホテル花水木（はなみずき）」の経営でこのホテルのコマーシャルソングはあの女優、松坂慶子が約 30 年前に歌ってヒットした「愛の水中花」です。

さて、二日目ですが岐阜県大垣方面の「お千代保稲荷（おちよぼいなり）神社」で商売繁盛を祈り、輪中（わじゅう）地帯にある秀吉が一夜で築き上げたと思われる「墨俣（すのまた）一夜城」を参観、とてもじゃないけど一夜では造れんわと思いきや城入口の説明書きに「短期間で造った」とあり変に納得しました。ただ、「一夜で造りました！」と上司の信長に報告し出世の道を切り開いていくところは秀吉の才覚であり男の仕事のやり方ではあると思います。そして滋賀県に入り近江八幡市の「郷土資料館・歴史民俗資料館・旧西川家住宅」等を会社を定年退職した地元のオジサン・オバサンによって案内してもらいました。こういう老後もベストだとも思いました。また、滋賀県は大きな面積を占める琵琶湖が色々な面で生活に関っていると感じました。写真の一枚はその日泊まったおごと温泉「雄山荘」の 10 階の部屋から撮影した夜明けの琵琶湖の幽玄な表情です。

ところで、ここで 2 日間 2 度もあった夜の大宴会のレポートです。要は公平に全員に番がきて歌えるよう伝統的によく準備企画されたカラオケ大会でした。この進行係は市老連副会長の宍戸明男さん（明倫）で、添乗員の日ノ丸観光トラベル倉吉営業所（海田西）の東本静美所長と天野重利担当部長との 3 人での手際よいタッグは昔からのいい意味での「絆（きずな）」を感じました。この観光会社のお二人は旅の全行程をまったく手を抜くことなく全会員に常に誠意を持って対応されました。添乗員はいわゆる皆が休みの時に働く職業で土日や盆暮れもなくとてもお忙しいお仕事です。海田西の営業所で事務を任せられお二人を支えている女性添乗員の方も含めてお三人に感謝と敬意の念を表すものであります。

ところで、私が 1 日目に歌ったのは、老人会の宴会には場違いの西城秀樹の「激しい恋」でした。浴衣が脱げ落ちるくらい壮絶なアクションで絶叫しましたがそのパフォーマンスに前列を陣取った 5～6 人の「上灘のかなり昔ギャルだった」女の人たちが周りを顧みずに「ヒデキー！」とはしゃぐ様にはこの老人会もまだまだ元気で先も明るいと我が意を強くしました。この様に皆が和気合い合いとおられるのもそれを纏めておられる市老連会長の中林正樹さんのご人徳の賜物であります。中林さんが醸（かも）し出される雰囲気もダンディの一言に尽き会長職も余人に代えがたいと強く思いました。

二日目も歌う機会がありましたが、これは研修委員長の恩田憲明さんが「琵琶湖周航のうた」をデュエットしようとして下さったもので忘れていたメロデーも直ぐに思い出して肩を組んで歌ったあげくに最後のフレーズを何とかハモって二重唱にしたものですから結構受けたのであります。滋賀県の歌に相応しいこの曲は大正時代に第三高等学校（今の京都大学）ボート部の学生が琵琶湖湖面で作ったとされ今でも京大の寮歌・学生歌として愛唱されています。この老人会の宴会も最後はレベル高いんですわ～・・・

さて、最終日は坂本の町「日吉大社・旧竹林院」から石山寺「源氏物語 / 紫式部ゆかりの寺」をめぐる昼食のあと井筒八ツ橋本舗」を回って倉吉への帰路に就きました。八つ橋本舗の店内には、滋賀県と京都府との境界点がありそこをまたいだり跳んだりしてはしゃぐ女性会員の表情には幼子のあどけなささえも感じました。

今回旅行で私が乗車した 1 号車の車両長は上灘の前田紀一さんでした。最後まで一人一人の安全に気を使われておられました。その責任感の強さに脱帽であります。本当にお世話になり有難うございました。

今、世の中は車が普及し性能も向上したので旅行のスタイルも個人で行うのが多くなってきました。昔の様に社員旅行とか職場旅行とかに頼って各地に行く事もなくなってきました。然し今回のこの旅行では逆に個人の旅行では得られない沢山の楽しみや知見知識を得る事が出来ました。倉吉市内の老人クラブの数は約 50 で会員数は 2,000 人を越えます。魅力ある旅行にしていけばまだまだ参加して下さる方も増えると確信いたしました。長文を読んで頂き有難うございました。  
～おわり～

(次葉に掲載する写真を添付します)



〈なばなの里「ベゴニアガーデン」にて、左から1号車車両長 前田紀一さん、筆者、前田令夫人、上灘のマドンナ〉



〈おごと温泉「雄山荘」10階から午前5時に眺める「トワイライト琵琶湖」〉



〈上井・福寿クラブの4人、右から野一色利忠さん、池田逸男さん、福田素巳さん、筆者〉



〈恩田憲明研修委員長と筆者のハーモニー、学生コーラスの片鱗を見せるか?〉